

共感する心を育む動物介在教育

文：尾形聡子



吉田太郎先生(立教女学院小学校教頭)

「学校に犬がいたら楽しいのになあ…」

ある生徒のたった一言で始まったともいえる、立教女学院小学校での動物介在教育（AAE：Animal Assisted Education）。その取り組みは今年で15年目を迎えることになりました。立役者である吉田太郎先生は現在、立教女学院小学校の教頭で、宗教主任をされています。9月1日に開催された第8回例会『共感する心を育む動物介在教育』では、吉田先生が小学校に犬を導入するきっかけから今に至るまでの道のりについて、ユーモア溢れる語り口調で紹介してくださいました。AAEを通じて子どもたちはどのように成長していったのでしょうか。

犬がいる小学校

東京都杉並区にある立教女学院小学校は、児童数が432名（36名2クラス）という規模のキリスト教系の小学校です。

「2003年3月生まれのバディという名のエアデール・テリアが初代学校犬となり、動物介在教育がスタートしました。2代目はバディの子どものリンク（2009年6月生まれ）でしたが、バディが2015年1月に亡くなると、後を追うようにしてその2ヶ月後にリンクも亡くなりました。」

犬がいる小学校、動物介在教育の様子はどのようなものなのでしょうか。

「キリスト教の聖書科の授業を持っていましたので、1年生から6年生まで全てのクラスで週1回教鞭を取っていました。聖書科の授業は、いわゆる公立学校でいえば道徳の授業の位置付けのようなものなのですが、その授業に犬を教室に連れて行き、初めの挨拶をした後に教室をぐるりと一周し、それから授業を始めるというような流れでやっていました。」

先生が授業をしている最中、犬たちはその脇で寝そべっています。

「授業の最後に感想を書いてもらい、それを教壇まで見せにきてもらいスタンプを押して終了、ついでに犬を触って帰る、というようなことをしていました。基本的には授業中は犬が何かをするわけではなく、犬を使って何かを教えるのも、年に数回ぐらいのものでした。」

聖書科の授業では、旧約聖書のアダムとイブやノアの箱舟などの話から、新約聖書のイエス・キリストの話までされるそうです。

「子どもたちは聖書の授業を面白いと言ってくれるのですが、それでもやはり、つまらなくなってくるとノートに犬の落書きをし始めたりするわけです。そういうわけで、ノートのチェックをすれば自分の授業のクオリティもわかる、というおまけも付いてきます（笑）。」

授業に参加しないときには、犬たちは自由に校庭を走り回ることもあれば、6年生が担当するバティ・ウォーカー（犬の世話がかり）のお姉さんたちが低学年の児童たちにダンベルを使った犬との遊び方を教えたりするなどして交流がはかられているそうです。

「動物介在教育（AAE）を始めた最初の頃はよく、“犬を学校に連れて行くと癒されるわよね”と言われてましたが、AAEは癒し効果を求めて行う活動ではありません。そちらは一般的にアニマル・セラピー（動物介在療法：Animal Assisted Therapy、AAT）として知られているもので、AAEとは主旨が異なります。また、そのほかに動物を介在させて行う活動には、高齢者施設などを犬と一緒に訪問するといった動物介在活動（Animal Assisted Activity、AAA）があります。」

学校犬の誕生

立教女学院小学校でのAAEは今年で15シーズン目に突入しましたが、そもそも吉田先生が犬を学校に連れて行こうと考えたのはなぜなのでしょう。

「立教女学院小学校に勤めて2年目くらいのときに、当時小学校4年生の生徒でちょっと調子が悪そうなMちゃんという子がいました。ある日Mちゃんが廊下ですれ違いざまにパッと私にメモを渡してそのまま過ぎ去って行きました。そのメモにはMちゃんの家電話番号が書かれていました。そのうちMちゃんが学校を休み始め、いわゆる不登校の状態が1週間、2週間と続いていったのです。」

不登校の子どもがいて何もアクションを起こさないわけにはいきません。メモの一件もあり、これは何とかしなくてはいけない、と吉田先生は考えます。

「電話番号が書かれたメモを渡してきたくらいでしたから、まずは電話をしてみましょう、と担任の先生を説得しました。電話をしてMちゃんのお母さんと話をしてみると、Mちゃんは学校を休んでいる間、一歩も外に出ておらず、パジャマで一日中過ごしているような状況だとわかったのです。」

そこでひらめいたのが“犬”でした。

「その当時、私はスコッチ・テリアを飼っており、Mちゃんは犬が好きで、尻尾の白いシロという名前のシーズーを飼っていたのを知っていましたので、今度の土曜日に犬の散歩を一緒にしない？と誘ってみたのです。そうしましたら、Mちゃんは意外とすんなり誘いに乗ってくれました。」

そうしてMちゃんと一緒に、土曜日の散歩が始められることになりました。

「毎週土曜日の散歩を重ねていきますと、Mちゃんの気持ちが少しずつ学校に向いてくるのがわかりました。そこで、土曜日の放課後なら他の子どもたちもいないから、一緒に学校に行ってみよう誘ってグラウンドに行きました。そこでMちゃんがつぶやいたのです、“ああ、学校に犬がいたら楽しいのになあ”って。」

Mちゃんは犬がいたら学校に来られるんだ、そう吉田先生は考えました。その後特例で、Mちゃんのお母さんにシロを小脇に抱えて放課後の学校に一緒に来てもらうことを続けたところ、Mちゃんはずいぶん学校に来られるようになりました。

「この出来事が学校に犬を、と思うに至った大きな理由です。しかし、それだけでは学校の先生方や保護者の方を説得するには足りませんでした。」

そこにもう一つ別の出来事が起こります。

「小学校2年生の子どもたちが、“クラスで飼っていたバッタが死んだので、お葬式をしてください”と言ってきました。バッタのお葬式かあ…と思いましたが、子どもが沈痛な面持ちをしていましたので、中庭へ行きバッタを埋めてお祈りをしました。」

その児童たちはお葬式をあげたことに満足してその日は帰って行きました。しかし、次の日も同じようなことが繰り返されることとなります。

「“先生、今度はカマキリが死んでしまいました。お葬式をしてください”と。バッタのお葬式をしてカマキリはしない、というわけにもいきませんので、カマキリのお葬式もあげました。そうこうしていると、次から次へと“お葬式をしてください”とやってくるようになったのです。」

そこで、吉田先生はその生徒たちに虫の飼育環境を尋ねます。すると、土も水も入っていない小さなプラスチックの箱の中に生き物をポイと入れているだけということがわかりました。

「最初は小さなバツタのいのちが失われたことを悲しんでいると思ったのですが、だんだんそうではなくなっていき、お葬式ごっこをするのが目的となっていたのです。これをきっかけに、子どもたちにいのちの大切さをどう教えたらいいのか？ということが、私の中での大きなテーマになりました。聖書の授業で私たちは神様から与えられた命を等しく持っているということを話し、子どもたちはそれを分かったように聞いてはいたのですが、実感することができていなかったのです。」

そこから色々検討を重ねた吉田先生。ついに学校に犬を！を実現するための活動を始めることになります。

「まずは教員の説得からです。20 数名いる教員の中から、犬好きなベテラン先生を説得するところから始めました。“学校に犬がいたらきっといいと思いますよ”と。最大の難関は校長先生でした。」

なぜなら当時の校長先生は、犬がたいそう苦手だったそうなのです。

「校長先生は、M ちゃんがシーズーを連れてきたとき、抱っこされている状態でも“キャッ！”と声を上げて逃げるほどでした。」

説得開始当初は、校長から“私が定年になるまではやめてね”と言われていたものの、吉田先生の度重なる説得に、ついに折れることになります。

“こんなにも吉田先生が言うならやってみましょう。失敗したら先生が責任を取ると言っていますから”と校長先生が言ってくれました。こうして犬を学校に連れてくるのを実現できる状況になったのです。」

しかし、その当時に吉田先生が飼っていたスコッチ・テリアは性格的に学校犬に向いていない、ではどの犬種にしようかと図鑑を見たり人に聞いたりして吉田先生は情報収集を始めます。

「その末に行き着いたのが、なぜかエアデール・テリアだったんです。兵庫県のブリーダーのところまで行き、2003 年 5 月 5 日に生後 55 日のエアデール・テリア、バディを迎えました。そこからバディとの毎日の学校通いが始まりました。」

もちろんのこと、当初はアレルギーの問題や、咬傷事故が起きたらどうするといった懸念はあったそうです。

「最初は子犬でしたから、甘噛みされたとしても大怪我には繋がらないから大丈夫でしょう、と。アレルギーの子どもに関しては、あまり近づかないようにしてもらおうようお願いしました。とにかく 1 学期間試しでやらせ

ていただき、そこからプログラムとして成立するかどうかご判断くださいと保護者の方にはお話ししました。」

ほとんどの保護者にはこの取り組みについて賛成してもらえたものの、一度だけ匿名で手紙が届いたことがありました。

「手紙には、“ある特定の不登校の子どものために吉田先生が学校に犬を連れてくるのを学校側が許可したとすれば、それはいかがなものかと思います”といった内容が書かれていました。それに対して私は全校児童の保護者に向けて手紙を書きました。“特定の生徒に対して犬を飼うという決断をするほどの学校なのです。もしあなたのお子さんが困った状況になった場合にも、私たちはできる限り一生懸命サポートしたいという気持ちでいます”と。」

それ以降、苦情は無くなったといえます。

「もちろん不安に思う保護者の方もいらっしゃったでしょうが、犬がいることを喜んでいる子どもの様子を見ると、その不安もだんだん溶けていったのだと思います。」

AAE が始まり吉田先生は、学校犬バディの学校の中での立場がしっかり持てるように、あらゆる場面に顔を出させるようにしました。

「たとえば、1年生の生活科の授業では絵のモデルをしました。目の前に生きたモデルがいると、子どもたちはとても詳細に絵を描くものなのです。図鑑を見て描きなさいというのとは全く違う絵が完成しますね。」

運動会の入場行進を犬と一緒にするのが毎年の恒例になり、遠足やキャンプなどの宿泊行事や、子どもたちが高齢者の福祉施設に訪問するとき、付属幼稚園への訪問にも学校犬バディは同行しました。

「子どもたちの変化も感じられました。バディがくる前、学校に犬がくることをまだ知らない子どもたちに犬の絵を描いてもらったのですが、その時に犬が大嫌いだった1年生の生徒は、歯が尖っていて爪も出ているような、今にも襲いかかってきそうなリアルな犬の絵を描いていました。その子は犬に追いかけられたことがあり、それが原因で犬嫌いになっていたのです。その直後にバディが学校にやってきて、1年間一緒に過ごした後その子が描いた犬の絵は、まるで違う子どもが描いたのかと思うくらいまったく違うものになっていました。尖った歯も爪もなくなり、草原でのんびり横たわっている、なんともんびりとした雰囲気のある絵になってしていたのです。たった1年でその子どもの持つ犬への印象が変わったのがよく見て取れました。」

学校犬とともに過ごす学校生活を続けていくには、懸念材料をひとつずつクリアしていかななくてはなりません。吉田先生は①咬傷事故・しつけ、②衛生面・アレルギー、③飼育費用、④教師の負担感、⑤保護者・学校の理解と協力の5つを挙げて説明を続けられます。

「まずひとつに、咬んだらどうするということがあります。これに関してはドッグトレーナーについてもらってきちんとしつけをしました。また、犬種は同じでも個体によって攻撃性の強さが違いますから、しっかりと子犬を選ぶことでも対応しました。後からお話ししますが、福島から引き取った犬が咬むんですよね。1、2年に1回くらいでしょうか。ひどい時には手を縫わなくてはならないこともありました。その時は本当に申し訳ないと保護者に深く謝ったのですが、逆に保護者から“おもちゃを犬から無理やり取ろうとして失敗して怪我をしたと娘が言っているの、先生、犬を怒ったり、学校に連れてこないようにはしないでください”とお願いされたのです。とはいえ、そこに甘えてはいけませんから、できる限り事故が起きないようにしていかなくてはなりません。」

二つ目は衛生面についてです。

「エアデール・テリアは自然に毛が抜け落ちにくい犬種ですので、学校の中をウロウロしても毛が散らばることはありません。また、口の形状的によだれがあまり出ません。定期的にシャンプーをしたり、タオルで拭いたりして清潔を保つことで、衛生面についてはだいぶ対応できています。アレルギー問題については、花粉症だからといって外に出ないというわけにはいきませんよね、マスクをしたり薬を飲んだりして対応しますよね、それと同じように考えていただけないでしょうか？と、保護者の方にお話しすると、なるほどと納得してくださいます。」

三つ目は飼育費用についてです。

「もちろん飼育費用はかかります。15年前に校長先生を説得するとき、すべて自分でやりますと言ってしまったので、学校の予算をつけることはしてきませんでした。今も引き続き予算をつけていません。飼育費用の状況を知った保護者の中には“先生一人に負担させるのは申し訳ない”と言って寄付をしてくださる方がいますし、ドッグフードを毎月送ってくださる方もいます。獣医さんは、卒業生であり保護者である方の病院と、保護者でPTA会長さんの病院に協力していただき、無償で診ていただいています。」

四つ目は教師の負担感についてです。

「これについてはもう、本人が負担に感じるかどうかでしかありませんよね。“大変でしょう？”とよく聞かれるのですが、私の場合は好きでやっていることですので、“好きにやらせてもらえているので大変だとは思いませんよ、むしろ横からああしろこうしろと口出しされる方が大変です”と答えています。」

五つ目は保護者・学校の理解と協力です。

「この活動は、保護者と学校の理解があってこそ成り立つものです。幸い関係者の皆さんに理解をしていただき、さらにサポートまでしていただき、とても恵まれている状況にあると感じています。」

いのちのぬくもり

15年間にわたるAAE活動の中で、学校犬が2回出産しました。

「妊娠中の犬のお腹のレントゲン写真を借りてきて、子どもたちと一緒に胎児の様子を見たり、子犬が何頭いるか数えたりしてきました。バディの最初の出産では、なんと12頭もの子犬が産まれました。初産で12頭はさすがにビックリしましたね。」

犬の乳首は10個なので、もれなくおっぱいがありつけない子犬が出てきます。

「お乳のたりない子犬にはミルクを与えなくてはなりません。途中で1頭亡くなってしまったので、母犬と子犬合わせて12頭を毎日学校に連れていき、子どもたちに母犬が授乳している様子を見せたり、実際に子犬にミルクを与えてもらったり世話をしてもらったりしました。誰もが子犬たちを見て“可愛い”と笑顔になっていましたね。子犬の持つ可愛さや生命力を見ると、大人も子どもも皆が幸せになれるものだと、学校中で体験しました。」

バディが子育てしている最中は、休み時間のたびに子どもたちは犬の世話をしていたそうです。

「最初は子どもたちは、可愛い子犬の世話ができると無邪気に喜んでいました。しかし、実際に世話の大変さを経験すると、決して可愛いだけじゃないということがよく分かったようです。その後に書かれた作文を読むと、思春期で母親と上手く行っていない子が、“お母さんて大変なんだね”といったことを書いていました。それを読んだお母さんは、母親の大変さに気づいてくれてことをとても喜んでいましたね。」

2回目の出産は4頭。最初に比べるとかなり楽な子育て期間となりました。

「子犬たちは学校だけでなく、高齢者施設へも連れていきました。おじいちゃん、おばあちゃんたちも、“うわぁ！可愛い！”と近づいてきて、バディが授乳している様子を嬉しそうに見ていました。そのような施設には子どもが行くだけでもとても喜ばれるのですが、間に犬を挟むと、犬が子どもたちと高齢者の方のコミュニケーションの橋渡し役となり、本当にいい効果が生まれると感じています。」

このような活動を行うには、とにかく専門家のサポートが欠かせないと吉田先生。

「ひとつは獣医さんによるサポート、そしてもうひとつはドッグトレーナーによる指導です。新しい飼い主さんのところへ行ったバディの子犬たちも参加して、一緒にトレーニングを行いました。また去年くらいから、1、2ヶ月に1度トリマーさんにきていただき、トリミングやグルーミングのサポートもしていただいています。」

つなげること、つながること

2011 年の東日本大震災以降、AAE 活動の内容が少し変化することになりました。

「福島原発事故の後、郡山などの関連幼稚園から SOS が届きました。ストレスから言葉が出なくなっていたり、外に遊びに行けなくて運動不足になっているなど、現地で子どもたちに起きているいろいろな話を聞きました。そこで、そちらまで学校犬を連れて行くので、子どもたちがどのような反応をするか試してみましようということになりました。」

幼稚園の子どもたちは犬の訪問に大いに喜びます。しかし、その帰り際に…。

「“また来るね”と言ったら、“また来るっていつだよ！”と、ある男の子が言うんです。その男の子は年長だったため、卒園したらそこには来なくなる、つまり、すぐに来てくれないともう会えないじゃないか、ということだったのです。」

全国各地から様々な人たちがその幼稚園に支援にやってくるものの、2 回目の訪問をする人たちが滅多にいなかったことが、男の子のその言葉に繋がったのではないかと園長先生。

「その日は楽しいけれど、2 回目はない。それを経験し続けていた子どもたちだったのです。最初の訪問は 10 月で、翌月にまた犬と一緒にその幼稚園を訪れたのですが、それはそれはとても喜んでくれましたね。私が犬と一緒にいくと知ったその男の子は、玄関のガラス窓にはりついて我々が到着するのをずっと待っていていました。」

当時、放射能の影響があったため、子どもたちは窓に近づかないようにと言われていました。しかしその時ばかりは、幼稚園の先生も子どもが窓に近づくのを止めなかったそうです。

「幼稚園だけでなく福島県庁ともやり取りをしていたのですが、その中でシェルターにいる動物たちも大変な状況にあることを知らされました。1 頭引き取って学校でなんとかしましようということなり、大型犬のイングリッシュ・セッターのウィルを迎えることになりました。」

そのシェルターでは大型犬は散歩にも連れて行ってもらえず、排泄もケージの中でしなくてはならないような状況だったそうです。

「一日でも早く出してあげたくて、その年の 12 月にウィルを引き取りました。子どもたちにも経緯を話し、皆で可愛がってウィルが新しい生活に希望を持てるようにしましようねと。そうこうしていましたら、翌 2012 年の 4 月に同じシェルターから再度連絡が来ました。ずっと放浪していて、1 年が過ぎてようやく保護した犬がい

るので見に来てくださいというのです。」

そこで吉田先生は再びシェルターに向かいます。

「そこには骨と皮だけになったポインターがいました。この状態では貰い手もないでしょうね、顔も怖いですしね、とシェルターの人と話をしていたら、その犬がじっと私の方を見て、一緒に行きたいとってくるのです…。車にケージを積んでいたのので、“乗るか？”とその犬に聞いたら“乗る！”といますので…連れて帰ることにしました。それにしてもシェルターの犬たちは不思議です。見ず知らずの人が行っても、ケージを見せるとさっと乗り込むんですよ。乗せてくれ、ここから出してくれ、とってくるんです。」

今でも吉田先生は、福島から引き取った犬を連れて福島の幼稚園に行き、犬と子どもたちの触れ合い活動を続けているそうです。

限りのあるいのち

「バディも10歳を越えると体のあちこちが悪くなってきて、学校に来てもほとんど寝ていることが多くなっていきました。リンクとローテーションを組んで、なるべくバディの体に負担がかからないようにしてやっていたのですが、入院することも増えていき、最後には点滴をしないと立てない状態が一ヶ月ほど続きました。それでも、死ぬまで一緒に学校に行きました。」

そうして、バディは2015年1月16日に世を去りました。

「皆とても悲しんでいました。しかし死を受け止めなくてはなりませんので、バディのお葬式を行いました。礼拝堂にバディの亡骸を安置し、そこに花を捧げ、子どもたちが書いた手紙や絵などを入れて、礼拝をしました。礼拝を行った日はそのまま礼拝堂に置いておくので、それぞれのクラスでバディとお別れをしてくださいと担任の先生に伝えたところ、どのクラスもそれぞれにお別れに行っていました。生前にあまり馴染みのない動物の場合には、亡くなった後の動物をあえて触ろうとしないと思うのですが、そこで印象的だったのは、子どもたちがバディに触っていたことです。ふわふわの毛をしているバディを見て“寝ているみたい”と言いながら触れると、冷たく固くなっている体に驚いて“冷たい、死んじゃったんだ…”と、そっと涙を流していました。でも子どもたちは切り替えも早いと言いますか、お昼休みには元気に外で遊んでいたりするものなんです。」

そんな風にして、子どもたちがバディの死を受け入れ、乗り越えていく様子が見えたと言います。

「翌月には、バディと関わったことのある卒業生や保護者の方にもご案内をして、記念礼拝を行いました。その中で、歴代の校長先生がスピーチをされたのですが、学校犬を導入するときの犬が怖かった校長先生もお話されました。実はその校長先生も、5年くらいかけて犬に触れるようになったんです。5年間毎日犬を見ていると、

60歳を過ぎてからでも犬に触れるようになるんですね。」

お葬式は悲しいものですが、その後に皆で思い出話をして懐かしんだり、バディの子どもたちを連れて来た方もいたりして、とても賑やかで同窓会のような記念礼拝となったそうです。

再出発

バディが亡くなった2ヶ月後の3月に、娘のリンクも後を追うようにしてこの世をさることになりました。

「実は東北へ復興支援に行っている間、リンクは仙台で急死してしまいました。ペットロスとは違うのですが、ショックすぎて何も手につかず、この活動をやめてしまおうかとも思ったほどです。しかし、残された福島からの2頭がいましたので活動は続けていましたが、その間に“やっぱりエアデールがいいな”とか“バディの子どもがいい”といった声をあちこちから聞き、私自身もどうにもエアデール・テリアの匂いや足音などが恋しくなっていました。夏ぐらいになって新しいエアデールを探そうと決心し、バディのブリーダーさんをお願いをして、バディの血筋の子を譲ってもらいました。それが、2015年9月生まれの、三代目のベローナです。バディの姪にあたります。」

ベローナはバディやリンクと比べると、かなりやんちゃな性格だそうです。吉田先生をもってしても手を焼いているようですが、学校の行事やキャンプなどの宿泊行事に参加して、学校犬としての活動をしっかりと引き継いでいるそうです。

「実は今、福島からの2頭、そして3代目のベローナに加え、もう1頭いるんです。2016年10月から盲導犬育成団体のアイメイト協会の繁殖犬、クレアを預かることにしました。」

繁殖犬ボランティアを始めたのは、去年に起きた相模原の障がい者施設が襲われた事件で、その時の犯人が“障がいのある人なんていなくなればいい”と口にしたことがきっかけとなったそうです。

「ネット上にも障がい者への批判的な文句が広がっているのを見るにつけ、もう少し福祉の部分にも目を向けていきたいと感じました。バディとリンクについては、うちの小学校の子どもたちが成長するための活動だったのですが、これからはもっと社会への貢献を、子どもたちに誰かのために貢献するということを、犬を通して感じて成長していった欲しいと思ったからです。」

さすがは盲導犬の繁殖犬だけあり、クレアはまるで犬の毛皮を被った人間のようにだと吉田先生。

「クレアは非常に賢いです。とても賢い犬なので、学校の受け入れとしても、1頭増えたところで何てことはありません。クレアも子どもたちと一緒に学内を散歩したり、宿泊行事に参加したりしています。」

そして今年7月1日、クレアは9頭の子犬を出産しました。

「子どもたちには妊娠から胎児の成長、そして出産、子育てまでの経過は写真を見せながら説明しました。しかしあつという間に夏休みに入ってしまったので、生まれてから終業式の19日までしか子どもたちには子犬の様子を見せることができませんでした。というわけで我が家には今、13頭の犬がいます。」

夏休み中は休む間もなく、まるで動物園の飼育係のような毎日を送っていたそうです。

「今日は15年間のAAE活動の軌跡を紹介させていただきました。小さい時に犬を飼ったり、犬に触れたりすることは、子どもが成長していく上でいのちの尊さを学んでいくことに自然に繋がっていきます。そして、その時には周りの大人たちの姿勢がとても重要になってくるのを実感しています。」

吉田先生のご講演の後は、日本ペットサミット会長で東京大学獣医外科学教室教授の西村亮平先生の進行のもと質疑応答へと入っていきました。



—今後、どのように活動を続けていけますか？

吉田先生：15年が経ち、この活動を続けていくには後継者を育てていくことも必要と感じ始めています。実は、バティ・ウォーカー（犬たちの世話がかり）を経験したことのある卒業生を、新人の先生として2名雇っていますので、彼女たちが継いでくれるといいなと思っているところです。新人なのでまだ犬どころではない状況ですが、たまにその先生たちのクラスに犬を連れていってもらったりしています。

西村先生：学校の先生は仕事が多岐にわたりものすごく忙しいという話を聞きますので、学校自体が本腰を入れてくれる部分がないと活動をするのは難しいのではないかと感じます。学校としてはどのような方向性を持つとしているのでしょうか。

吉田先生：ウサギやニワトリなどの学校飼育動物でも同じなのですが、飼育担当の核となる先生が、ボランティア的にやっていかないと、いくら制度を整えたところでなかなかうまくいきません。遊び心といいますか、多少のユルさといいますか、余分なことをしてもそれが面白いならいいんじゃないか、というくらいの気持ちでいる

先生を中心にしていけないと、うまく続いていけないと思います。むしろ、学校側があまりガチガチにしていると、たとえば、労力を計算してコストパフォーマンスが悪いから、とやらなくなってしまう。ですので、学校としてサポートできる部分というのは、それほど無いと思います。あくまでも、担当する先生による、という感じでしょうか。

—アレルギーを持つ生徒さんたちには、実際にどのように学校犬と接するよう指導されましたか。

吉田先生：アレルギーのひどさにもよりますので生徒それぞれですね。ある生徒は、酷いアレルギーを持っているにもかかわらず、犬の世話がかりをやりたいと言いました。それは無理だから止めておきなさいと返事をしたら、その子の母親から手紙が来たのです。ゴーグルをしてマスクもするからやらせてください、と。それに対しては、そこまではするのですでしたら分かりました、とお返事をしました。また、高学年になってくると少しアレルギーも弱まってきて、自然と大丈夫になっていく場合もあります。今年の6年生の中にはひどく目が痒くなってしまっている生徒がいるのですが、母親と相談したところ、娘と犬との関わりを全くゼロにしたい、ということでした。ですので、その生徒のいる教室には毛の抜ける犬種は連れていけない、もしくは連れて行ったとしても出入り口のところに座らせておく、というようにしました。このように、相談しながらケース・バイ・ケースで対応しています。

—ラブラドルのクレアと子犬たちは、これからどうなるのでしょうか。

吉田先生：実は明日始業式で、夏休みの間にぐんぐん成長した子犬たちを連れて行きますが、その二日後、アイメイト協会の方が次の飼育ボランティアのお宅に全頭連れて行くことになっています。母犬のクレアは残って、1年後にもう一度出産する予定です。

—全国の学校にこの活動が広がって行くといいなと思うのですが、広げて行くためのヒントとなるようなことがありましたら教えていただけないでしょうか。

吉田先生：私は同志社大学の出身なのですが、数年前に創立記念の礼拝に呼ばれて話をしに行ったことがあります。その時に、学校犬の話を教員の研修会でしたのですが、“ええなあ、それ”などと言いながら聞いていた同志社中学の先生から後日連絡がきました。関西盲導犬協会の不適格犬（トレーニングプログラムの最中に盲導犬に向いていないと判断された犬のこと）を譲り受けて、学校に連れて行きたいとお話でした。それが実現し、この7月から学校犬プログラムが始まったそうなのですが、今は生徒よりも先生の方が犬に夢中になっているようです。そんな感じでスタートできれば、案外ハードルは低いのかもしいと思います。そのためにも、こういったところは意外に大丈夫ですよ、逆に、ここは大変でしたよということを知っていただき、その上でうちの場合はこうすればできるかな、という具合に考えてやっていただければ、学校犬の活動ができる可能性が出てくると思います。

—学校に犬を連れて行くことで、犬好きの子どもは増えていくと感じますか。

吉田先生：犬好きの子どもは増えていると思います。実は犬だけでなく猫もやりたいと思っていて、図書館に猫をと提案してみました。しかし、猫のアレルギーの方が強いのと、猫アレルギーの子どもが本を借りられなくなってしまったのも…と、ちょっと難しいと感じているところです。

西村先生：アレルギー問題については、保護者に納得してもらうのがなかなか大変そうだと思うのですが。ひとりでも強硬な意見を持つ人がいると、ならば無理かな…と思って諦めてしまうのが大半ではないかと。お話を聞いていて、吉田先生はそこを上手に持って行っているなあと感じました。

また、子どもたちの仲が良さそうな写真がたくさんありましたが、犬が学校にいと、いじめが減るといったような何らかの関連性は見られますか。

吉田先生：いじめは犬とは関係なく、やはりありますね。共感するといいますか、自分以外の人の気持ちを考えたり、想像する力を伸ばしていくしか、いじめの問題を解決していく術はないと思います。そういう意味で、この活動が少しでも役立てばとは思っています。不登校に関しては15年間ゼロです。学校が楽しいのですね。

西村先生：それはやはり学校で犬に会うことが楽しみになっている、ということなのでしょうか？

吉田先生：犬が好きの人ばかりではないにしても、やはり楽しさがあります。今回もらった暑中見舞いを見ても、全員がクレアの子犬はどうなりましたか、早く会いたいです、といったことを書いてくれていましたから。子どもたちは皆、始業式で子犬に会えるのをとても楽しみにしているんです。

西村先生：それでもやはり犬があまり得意じゃない、好きではない、という児童もいるのでしょうか。

吉田先生：そういう子もいますし、教員にもいます。キライ！という子どもはいませんが、犬にわーっと来られると怖いので遠目に見ていよう、でもチャンスがあれば触ってみようかな、という感じですね。

西村先生：世間的に見れば、犬を飼っている人は少数派ですから、多数派の飼っていない人がどのように思うのがとても重要だと思っています。積極的に犬を飼おうとはしなくても、犬がいるといいね、というふうに感じてもらうことが大切かなと。

吉田先生：実はずっと犬がキライな人がいるなんて知らなかったんですよ（笑）。この活動を始めて、犬がキライな人がいるのを初めて知り、その時はビックリしてどうしよう…と思いましたが（笑）。

—高齢者施設への訪問は準備なども含め大変ではないのでしょうか。あれこれ準備を整えて訪問しても、あまり長時間滞在できずに帰って来なくてはならない、ということはありませんか。

吉田先生：それは受け入れ側の施設によると思います。信頼関係のある中で、どうぞ来てくださいといってもらえるところにしか今は行っていませんので、準備などはあまりありません。シャンプーするくらいでしょうか。訪問の時には子どもが歌を歌ったり出し物をしたりするところに犬も一緒にいるという感じで、だいたい 2～3 時間ほど滞在しています。

—今の活動が、小学性だけではなく、中学生、高校生と、どのくらいの年齢までいい影響をもたらすことができると考えていますか。

吉田先生：会社に犬を連れていくことでも皆が楽しくなる、子犬の映像を見てもらえばこの会場にいる皆さんが笑顔になる、ということを考えれば、どの世代でも影響は同じなのではないかと思います。ただ、中学生に入ると子どもたちが忙しくなってくるので、時間的に犬に構ってられない、となるかもしれません。ですが、クラブ活動的に、空いている時間に犬のお世話をするというようにしていけばいいのではないかと思います。また、中学生以上になると教師も忙しくなりますので、そういう面からも敬遠されがちになるかもしれません。

—死の経験を乗り越えられずに引きずってしまう子どもたちはいなかったのでしょうか。

吉田先生：それが全くいなかったのです。キリスト教の学校なので、日頃から、いのちというものの捉え方といえますか、そこに執着しすぎないように、ということをお話ししていたからというのものもあるかもしれません。子どもは案外、精神的にタフですね。皆できちんとお祈りをして、天国へ見送るという儀式を行ったことでも、前向きになりやすかったかもしれないと思います。キリスト教だけではありませんが、死の経験をすんなり乗り越えられたのは、宗教の力というのも少なからずあるかもしれません。